

# 対義形容詞「明るい」と「暗い」の意味的非対称性に関する一考察

## —アフォーダンスの視点から—

趙 萱\*

### 1. はじめに

対義語というのは、一般に、意味において相違があるもの、もしくは意味が相反するものであるとされる（『大辞林 第二版』(p.1518)）。しかし、対になる語が多義的である場合、それぞれの意味がすべて対義的に対応するとは限らない。例えば、「明るい」と「暗い」は、以下の(1)から(3)に見られるように、意味的非対応が観察される。「明るい」は、(1)のように「公明である」という意味を表したり、(2)のように嗅覚に関わる印象を表したりするのに対して、「暗い」という語がその対になる意味を意図して使われることはあまり多くない。また、反対に、「明るい」は、(3)の「暗い」が表すような「不幸や不運が感じられるさま」の対となる意味では使われにくい。このように、「明るい」と「暗い」という対義形容詞には、意味上の非対称性が見られる。

- (1) そこで、元和の時代、朝廷が明るく少しのにぎりもなかったというのは、宰相初め、こうした人たちがいたからである。(PB42\_00041)<sup>1</sup>
- (2) 人生は1度しかない、そんな前向きな気持ちになれる明るい香り。(PB5n\_00067)
- (3) 確かに、神崎には暗い過去があって、いくつかの大きな犯罪に係り合っていたらしいと思われている。(LBe9\_00164)

このように、あることばに限って持つ語義と用法は、語彙の「コロケーション」という分野の問題と関わっていると考えられる。つまり、言葉の使用には一定の偏りがあり、対義語であるとしても、その共起関係が対応するわけではないと言える。

したがって、本稿では、「明るい」と「暗い」の連体用法を中心に、両形容詞の共起名詞の非対称性について考察し、その意味的非対称性が生じた原因についてアフォーダンス理論で詳しく検討する。

### 2. 「明るい」と「暗い」の意味的非対称性に関する先行研究

形容詞に関する研究は形容詞の定義・分類（西尾1972；荒1989；樋口1995；北原2010など）から、形容詞の意味機能に対する比較（丹保1997；秋元2000；八亀2004；周2017など）や形容詞の多義性をはじめとする意味的研究まで、多方面で行われてきている。

その中で、多義的視覚形容詞「明るい」と「暗い」の多義性分析を行う研究が見られる。総体的に見ると、「明るい」と「暗い」の持つ多義性は、先行研究でも盛んに考察の対象となっているが、先行研究では、「明るい」だけを分析対象とするものや、「明るい」と「暗い」を比較せずに分析するものがあるが、「明るい」と「暗い」の非対称性に関わる要因について考察しているものがほとんど見られない。以下では、「明るい」と「暗い」

\*北京外国語大学北京日文学研究センター・院生

が意味的に対称性を有するかどうかという論点について、大石（2007）と王（2020）の研究を見てみよう。

まず、大石（2007）は、多義語の意味拡張を分析するために、「明るい」と「暗い」を例に、その共起名詞を表1のように分類した<sup>2</sup>。また、「明るい」と「暗い」の共起名詞の相違点について、『明るい未来』に対して『暗い過去』のように、共起する語そのものは異なるが、2つの形容詞がほぼ同じカテゴリーの名詞群と共起している（p.162）と指摘しており、両形容詞には意味的な対称性があることを示唆している。ただし、表1からもわかるように、なぜ同じカテゴリーの中で、「明るい」と「暗い」は「光」や「色」「顔」といった名詞と共起するのは同じであるが、「かげ」（「暗い」としか共起しない）や「表情」（「明るい」としか共起しない）といった名詞と共起するのはそれぞれ異なるのであろうか。この問題については大石（2007）では考察されていない。

一方で、「明るい」と「暗い」は意味的に非対称であると主張する先行研究として、王（2020）

表1 限定用法の場合「明るい」「暗い」と共起する名詞の分類（大石2007:162）

	明るい	暗い
限定用法	壁、空間、室、島、ステージ、空、店舗… <sup>3</sup>	穴ぐら、家、海、駅…
	材料、もの	雲、水脈、物質…
	うち、春、昼、白夜	冬、夜
	光線、照明、太陽、光…	かげ、影、光…
	赤絵、色、色彩、茶色、花柄	青、色、寒色、色調
	彼女、クラスメート、国会議員、親友…	中堅、両親
	笑顔、顔、表情	顔
	家庭、環境、状況、雰囲気	世相、雰囲気、イメージ…
	将来、人生、展望、見通し、未来	過去、時代、日々…
	感じ、性格、人柄	詠嘆、気持ち、疑惑…
	声、調べ、笑い声	ニュース、話、結末
	作品、冗談、ニュース、話…	運命、勢い、一面

がある。王（2020）は、大規模コーパスを用いた定量的分析を行い、「明るい」と「暗い」に（4a）と（4b）のような意味的・統語的な非対称性があることを明らかにした。「明るい」は様々な名詞と共起することができ、「明るい谷先生」や「明るい町」のように直接的に名詞を修飾することもできるが、「明るくはきはきした鈴」や「明るく生き生きとした秋田市」といったように他の修飾語の挿入がある場合もある。それに対して、「暗い」は限定用法である場合にはそれほど多様な名詞と共起しやすいとは言えず、しかも固有名詞と共起する場合であっても、ほとんど「暗くやばったニクソン」や「暗く精彩のない片田舎」のように他の修飾語が挿入される。一方、（4b）のように、「暗い」は「明るい」より自由に「運命」や「凶事」といった「境遇」名詞類と共起しやすいことがわかる。ただし、そういう非対称性の背後にある理由については詳しく述べていないという問題点が残っていると言える。

#### （4）非対称性の例（王2020:80-89）

a. 限定用法においては「明るい」のほうがより好まれ、より多様な名詞と共起し得る。

「人物」のような固有名詞：

「明るい谷先生」「明るくはきはきした鈴」

「地域」のような固有名詞：

「明るく生き生きとした秋田市」「明るい町」

b. 一方、人の身の上に巡る不幸の成り行き、安否、そして社会において人が置かれている地位や立場の意味を表す名詞（「境遇」名詞類）と共起するときには、反義語である「暗い」のほうがより多用され、より自由に名詞との共起を許しやすい。

「暗い運命」「暗い出来事」「暗い凶事」…

次章では、「明るい」と「暗い」の連体用法を中心に、この両形容詞の共起名詞の非対称性について検討することで、形容詞の意味的非対称性が

生じた原因について考察する。

### 3. 「明るい」と「暗い」の共起名詞の非対称性に関する調査

本章では、NLB (NINJAL-LWP for BCCWJ)<sup>4</sup>という日本語コーパスツールを用い、「明るい+X」と「暗い+Y」のそれぞれの共起名詞を抽出し、調査を実施する。また、「明るい」と「暗い」の共起名詞の所属する分類項目に焦点を当て、この両形容詞の共起名詞の分類項目のコーパスにおける出現頻度からその意味的非対称性について検討する。

調査する際には、形容詞の使用頻度とその特徴的な共起関係も考慮に入れ、検索条件を「頻度は2以上」と「LD差<sup>5</sup>は±2」に設定した。最終的に、異なり語数である82例の「明るい+X」と異なり語数である84例の「暗い+Y」を抽出した。それから、『分類語彙表』<sup>6</sup>における本項目を検索し、その所属する分類項目の出現頻度について調査した。

結果は表2と表3の通りである。誤差をできるだけ小さくするため、考察の際には、形容詞の『分

表2 「明るい」の共起名詞の分類項目

類	部門	中項目	分類項目	分類項目の出現頻度	見出し
体	自然	自然	色	10	色彩、ピンク、ベージュ、青、グレー、水色、配色、紅色(べにいろ)、褐色、カラー
体	自然	自然	光	6	日差し、陽光、蛍光、月光、光線、映像
体	関係	空間	ふち・そば・まわり・扱い	3	窓辺、窓際、環境
体	活動	心	表情・態度	3	ほほ笑み、笑み、態度
体	生産物	機械	灯火	3	ライト、街灯、電球

類語彙表』における分類項目の出現頻度が3及び3以上のもののみ見ていくことにする。表2によると、「明るい」は主に〈色〉<sup>7</sup>や〈光〉分野の名詞と共起しやすいことがわかる。

それに対して、表3が示しているように、「暗い」には主に自然関係の名詞と共起しやすい傾向が見られる。「暗い」の共起名詞の分類項目の出現頻度が3及び3以上のものは〈道路・橋〉〈光〉〈穴・口〉〈山野〉〈部屋・床・廊下・階段など〉などの9種類があり、その中の6種類が自然関係の名詞である。また、分類項目〈道路・橋〉の出現頻度が10であることからわかるように、「暗い」の後ろによく〈通ridor〉という種類の語が付いてくる。

### 4. 考察

本章では、調査でわかった「明るい」と「暗い」の共起名詞の分類項目における非対称性を考察し、

表3 「暗い」の共起名詞

類	部門	中項目	分類項目	分類項目の出現頻度	見出し
体	生産物	土地利用	道路・橋	10	トンネル、路地、小路、通路、地下道、舗道、参道、道端、坂道、山道(やまみち)
体	自然	自然	光	4	影、やみ、陰(かげ)り、陰(かげ)
体	関係	形	穴・口	4	穴(あな)、すき間、洞(ほら)、入(い)り口
体	自然	天地	山野	4	洞窟、洞穴(どうけつ)、谷間(たにま)、丘
体	生産物	住居	部屋・床・廊下・階段など	4	回廊、階段、独房、病室
体	活動	心	感情・気分	3	情念、情熱、感情
体	自然	天地	川・湖	3	ふち(淵)、深淵、川(かわ)
体	自然	天地	地相	3	木立、茂み、林(はやし)
体	関係	空間	奥・底・陰	3	地底、奥、海底

その意味的非対称性の原因を考えていく。

調査によれば、「明るい」と「暗い」はそれぞれ特徴的な共起関係を持ち、「明るい」は〈色〉を表す名詞と共起しやすく、「暗い」は〈通り道〉を表す名詞と共起しやすいという傾向があることがわかる。

アフォーダンス理論で以上の調査結果を解釈できると考えられる。4.1節でアフォーダンスという理論を概観し、4.2節で調査結果を解釈する。

#### 4.1 アフォーダンス

アフォーダンス (affordance) は、アメリカの知覚心理学者ジェームズ・ジェローム・ギブソン (James J. Gibson) による造語であり、英語の動詞 afford を名詞化したものである。佐々木 (2015) によれば、アフォーダンスは「環境が動物に与え、提供している意味や価値」である (佐々木 2015:60)。例えば、「野菜」は、人間にとって「食べられる」という価値を与える。さらに、同じ環境でも、提供する相手が変われば、与えられる価値は異なる。例えば、「水」は、人間にとって「飲む」や「浴びる」や「溺れる」といった価値を与えるが、魚には「えら呼吸」という価値を与える。

アフォーダンスの視点から見れば、人間は世界に埋め込まれて存在している。本多 (2013) によると、人間の知覚の成立には、身体で周りの環境や他者へ接触することで、世界を知覚し、また、それによって自己を知覚するというプロセスが必要であるとされている。また、本多 (2005) は以下のように述べている。

「Gibsonの生態学的な知覚論においては、知覚を成立させる『情報』は環境の中に埋め込まれており、環境を探索してその情報を抽出することが知覚であるとされる。自己についての情報は環境についての情報と同様に環境の中に実在する。自己知覚も環境の知覚もともにその情報を抽出することで達成される。」(本多2005:41)

このように、アフォーダンス理論では、知覚者と環境のインタラクション (相互作用) が重要だとされている。人間は行為を行わなければ、すなわち環境を積極的に探索しなければ、環境の知覚も自己知覚も成立できないわけである。これは本多 (2013) において「知るための行為」と指摘されており、いわゆる「モノの性質を知るためには行為を行わなければならない (本多2013:105)」ということである。

次節では、アフォーダンスの考え方に従い、調査でわかった「明るい」と「暗い」の共起名詞における非対称性を作り出す要因について分析する。

#### 4.2 「暗いY」のYに〈通り道〉の名詞が多く共起する理由

本節では、前章で得た調査結果をアフォーダンスの視点から詳しく見てみよう。

このように、なぜ「暗い通り道」はよく使われるが、「明るい」はほとんど〈通り道〉の名詞と共起しないのであろうか。

「暗い通り道」という表現を使うとき、我々人間は、通り道に「暗い」という属性や評価を与えている。アフォーダンスの視点から考えると、「暗い通り道」は、人間に「恐怖」や「不安」という有標な価値を与えるが、反対に、「明るい通り道」は、人間に「安心」を与えるわけではなく、単に「通り道」の価値である「通れる」ことのみを与えていると考えられる。ことばにある情報の重要度から見れば、「暗い通り道」は重要度が高いのに対して、「明るい通り道」は重要度があまりないと言える。沈 (1999) は対義語の有標性を取り上げる際に、以下のように指摘している。

「論理上から見れば、対義語においては無標 (unmarked) の方はたいていプラスの意味を持っているのに対し、有標 (marked) の方はたいていマイナスの意味を表す。一方、“難”と“遠”は論理上ではマイナスの意味を表すが、認知の面で

はいずれもプラスの方である。認知の面におけるプラスの方とは、顕著な特徴を持つためより気付かれやすく、より注意を引かれやすい語のことである。反対に、認知の面におけるマイナスの方はそういう顕著な特徴はそれほど多くはない。例えば、仕事をするとき、困難はいつも有利な環境より注目されやすいため、我々には仕事の処理しやすい部分にほとんど気を配らず、それよりその困難な部分に非常に敏感である傾向がある。<sup>8)</sup>

(沈1999:178-180)

よって、論理上ではマイナスの意味を表す「暗い」は有標な価値を持つものの、認知の面では「明るい」よりプラスの方であるわけである。それで、「暗い通り道」の「周りの環境が見えにくいから通りにくい」という特徴は実は知覚者にとって非常に注目されやすい困難であるため、情報の重要度からも高いと考えられる。

したがって、「明るい通り道」という表現よりも、「暗い通り道」という表現が圧倒的に多く使われているのだと思われる。

それはまさしくギブソンが主張している「世界を知覚することも自己を知覚することである」につながっているのではないかと考えられる。つまり、我々は知覚するために、言い換えれば、自分と世界とのつながりを作り出すために、生まれつきの組織された身体が設けられている。「見るシステム」で周囲の物事を知覚し、思考することと同時に、自己を知覚し、さらに自己を語っているのである。「暗い」+〈通り道〉という共起関係では、話者（知覚者）が周囲の環境の変化、すなわち光の量が多い「明るい」環境から光線が足りない道を通るとき、目でこうした変化を知覚し、「道は暗いな。通りにくくて嫌だな。」という心理状態が生じてきており、これと同時に、環境の知覚を得た自分のことを知覚することができるわけである。

## 5. おわりに

本稿はアフォーダンスの視点から、対義形容詞「明るい」と「暗い」の連体用法としての共起名詞の非対称性について考察することで、この両形容詞の意味的非対称性について見た。今後の課題として、「明るい」と「暗い」の多義語としての性質も考え、「明るい」と「暗い」の多義性と共起名詞の分布の非対称性における関連性を探し、さらにこうした多義的対義形容詞の意味的非対称性について考察していきたい。

### 注

- 1 本稿にある用例は提示がない限り、全部『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から検索したものである。
- 2 大石(2007)では「明るい」と「暗い」の共起名詞を限定用法(本論文では連体用法と呼ぶ)と叙述用法(本論文では述定用法と呼ぶ)に分けて分類したが、本論文は連体用法を中心としているため、前者だけを見ることにする。
- 3 紙幅の都合で、本論文では大石(2007)の挙げた共起名詞の一部のみを示した。大石の表から省略した部分がある場合、「…」で表す。
- 4 NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)とは、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を検索するために、国立国語研究所とLago言語研究所が共同開発したオンラインコーパス検索ツールである。「名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できるのが最大の特長である」とされる(NLBのWebページより)。
- 5 赤瀬川他(2016)では、LDとは、ログダイス(logDice)の略語でダイス係数を対数化した指標のことであり、コロケーション統計でも最もバランスのとれた指標の一つであると指摘している。そして、LD差とは、簡単に解釈すれば、ある表現と共起する語が、どれだけその表現に特徴的かを測る度合いであると言える。LD差の絶対値が大きければ大きいほど、その共起関係は表現に特徴的であると言える。例えば、「Xが冷える」と「Yが冷める」のLD差を考えた場合、「下半身」という語は「Xが冷える」としか共起できないので、「下半身が冷える」はLD差が大きい表現であると言える(例はNLBのwebページより)。

- 6 分類語彙表とは、語を意味によって分類・整理したシソーラス（類義語集）である。1964年に出版された初版『分類語彙表』（現在は絶版）は、現代日本語の本格的なシソーラスとして幅広く活用されてきた。本論文では、『分類語彙表 一増補改訂版一』のデータベース版を利用した（国立国語研究所言語資源開発センターのwebページを参照）。
- 7 本稿では、共起名詞の意味分野を〈 〉で表示する。
- 8 ここは筆者の訳文である。原文は“从逻辑上看，反义词中的无标记项大多是肯定项，有标记项大多是否定项。但是，“难”和“远”虽然是逻辑上的否定项，但在认知上它们是肯定项。所谓认知上的肯定项是指对人的感知而言具有某些显著（salient）特征、因此更能引起人的注意的那一项，否定项则缺乏相应的显著特征。在完成任务时遇到的困难总是比有利条件更引人注目，我们很少注意到任务容易的一面，而对困难的一面特别敏感。”である。

は自分の外にある』開拓社  
 八亀裕美（2004）「形容詞の文中での機能」『阪大日本語研究』16, pp.51-65  
 周彤（2017）「日语形容词连体修饰的语义功能及其认知」背景解放军外国语学院学报, 第40卷第1期, pp.85-91

参考文献

Lakoff, G. (1987) *Woman, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Univ. Of Chicago Press (池上嘉彦ほか訳 (1993) 『認知意味論——言語から見た人間の心』紀伊國屋書店)

秋元美晴 (2000) 「形容詞の文体論的考察——連用法を中心に」恵泉女学園大学人文学部紀要 (12), pp.87-102

荒正子 (1989) 「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学3』, pp.147-162 むぎ書房

大石亨 (2007) 「日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について」『日本認知言語学会論文集7』, p.160-170

王軒 (2020) 「大規模コーパスを用いた日本語の視覚形容詞メタファーの使用傾向の定量的検討」東北大学博士学位論文

北原保雄 (2010) 『日本語の形容詞』大修館書店

佐々木正人 (2015) 『新版 アフォーダンス』岩波書店

丹保健一 (1997) 「形容詞の連体、連用、終止用法の出現頻度と意味との関連性をめぐって」『三重大学教育学部研究紀要』第48巻, 人文・社会科学, pp.9-18

西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

樋口文彦 (1995) 「形容詞について」『教育国語』2-18, pp.2-11, むぎ書房

本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論——生態心理学から見た文法現象』東京大学出版社

本多啓 (2013) 『知覚と行為の認知言語学——「私